

劍門の道中にて微雨に遇う（陸游）

衣上の 征塵 酒痕を 雑う

遠遊 処として 消魂 せざるは 無し

此の身合に 是れ 詩人 なるべきや 未や

細雨 驢に 騎つて 劍門に 入る

衣上征塵雜酒痕 遠遊無處不消魂
此身合是詩人未 細雨騎驢入劍門

解説 興元が成都へ赴任する途中に作ったもの。旅の途中、自分の人生をふりかえって、その感慨を述べている。

語釈 ※劍門Ⅱ山の名。北地から蜀へ入る関門となっていた。

※征塵：旅のちり。※消魂Ⅱたましいがゆすぶられる。深く感慨を発すること。※合是詩人未Ⅱ「きつとくのはずだ」の意。「詩人であるべきなのだろうか。※細雨Ⅱこまかな雨。霧雨。

※驢Ⅱ驢馬。

通釈 旅のちりにまみれた着物に酒のしみがまじってついていく。遠い旅路をゆくと、どこを見ても心がゆすぶられる思いだ。このわたしは、いったい詩人であるべきなのだろうか。糸のように細い雨の中を、驢馬にゆられて劍門へとはいってゆく。